

# スタジオ夜話

第87話 スタジオ夜話

## 「音へのこだわり」Ⅲ

### おかしなお話

#### ☆ はじめに

いつになったら騒ぎは収まるのでしょうか？ 県外への移動も可能になりましたが、感染者の数は一向に減る様子はありません。筆者は高齢者で持病も、怖くて外出は未だに最低限にしています。読者皆様も健康にはくれぐれも・・・ということでございます。

さて今回のスタジオ夜話、前回に引き続き「音へのこだわり」その③です。お付き合いよろしく願いいたします。

#### ☆ 「音へのこだわり」とは？

スタジオ夜話では「音へのこだわり」に良い音、好い音という側面からお話をしてきました。この両者の棲み分けがハッキリとしないのが音楽界での様々な問題に大きく影響しています。優秀な録音の賞をとるような作品でも演奏が？では賞に値するのでしょうか、とか？安価な録音機器では素晴らしい作品の制作や録音はできないのでしょうか？です。

良い音、好い音という分け方では測ることができません。また何を基準に良い音を決めているのでしょうか筆者には疑問です。世の中にある様々なジャンルの音楽ソース、例えばジャズの名盤？確かに素晴らしい演奏とファンなら誰も納得するであろうものがリストされています。しかし良い音、好い音という選択肢でリストされたものではないことは明らかです。（若干その要素はふくまれているがそれは重要ではないようです。）

読者皆様、特に音というものを専門にしていられるプロフェッショナルの方々はプロという意識の中で音にこだわり

をもって日々仕事をしています。筆者はその音に対するこだわりとは何か？が作品を創る上で最も重要なことであると考えています。

またこのこだわりを理解することで良い音、好い音という棲み分けの問題も解決できると信じています。

#### ☆ 「音へのこだわり」

##### プロフェッショナルとしてⅠ

安価な機材、高級な機材、優れた録音環境などの問題は重要な要素であることは間違いではありません。しかしここにこだわることはプロフェッショナルとしては問題があります。多くのプロフェッショナルはより良い作品創りを目指しています。その作品が音楽 CD だと仮定してみましよう。

当たり前はなしですが、音楽は（歌詞のないもの）抽象的な表現ではありますが作曲家がある想いを込めて創ります。演奏者はその想いを理解して演奏するのです。

この単純なことが以外と理解されていません。専門の教育機関で学習した音楽家は作曲家の想いの理解するため様々な角度から学習研究を重ねています。（それが正解かは不明な点は多い）また演奏者の中にはそうした学習をしなくとも学習研究をした者たちを感動させることができる演奏者も存在します。天才的才能を持つ演奏者です。話をもどしますが作曲家の想いを演奏者に、その演奏を観客にという連鎖が重要ということです。読者皆様は観客ではありません。

この想いを理解して観客に伝える、演奏者と同じ立場にあります。この想いは作曲家や演奏家などその想いについてコミュニケーションをとって作業することが重要

です。クラシックなどすでに作曲者が存在しない作品ではその CD の企画意図や指揮者や演奏者の想いを理解する必要があります。日々の仕事の中では冗談じゃない的な手間なのですがとても重要なことです。

#### ☆ 「音へのこだわり」

##### プロフェッショナルとしてⅡ

作曲家や演奏者、企画立案者など様々な立場の人とのコミュニケーションが音へのこだわりにつながります。ある作曲者が自分の想いを主旋律に合わせて伴奏するクラリネットに託したパートを録音するとしましよう。もちろん指揮者や演奏者はこのパートではクラリネットの演奏を若干たてるか、クラリネット以外を主旋律を除いて抑えることをするかもしれません。

問題はそのパートの演奏バランスが明らかに変わるということです。この想いを知っているエンジニアはこの変化に当然対応しません。また心地よい変化になるようにマイクロフォンをセッティングするときに考慮してセッティングすることでしょう。これが音にたいするプロフェッショナルとしてのこだわりです。

コロナ以前 2018 年にライブで聴いた演奏が CD 化され聴きました。あまりにも CD の演奏がバランス良くきれいな音で驚きました。これはこれで良いのですが・・・といったことはよくあります。

CD 出版の企画意図やトラックダウンしたエンジニアの想いを知りたいものです。また演奏の想いに合わせたマイクロフォンのセッティングはしたのでしょうか？といったことです。

多くのエンジニアがこの会場でこのオーケストラなら基本マイクロフォンのセッティングは、補助マイクロフォンは・・・といった作業をしているのではないのでしょうか。効率的な作業も重要ですがプロフェッショナルとしてこだわってみるのも良いかと思えます。



カモメになって、飛んでみました。(コロナ禍の妄想) 西へ向かっています。カモメというとなぜか「ジョナサン」の名前が浮かびます。ググってみると作者リチャード・バック「かもめのジョナサン」は、1970年に発行され、72年に世界中で大ヒット、発表から44年後に幻の第4章を含む完成版が公表された。という (mo)

☆「音へのこだわり」  
プロフェッショナルとしてⅢ

スタジオ夜話では「音へのこだわり」というお話で、良い音、好い音という側面からお話してきましたが、今回音へのこだわりを「こだわる」という意味からお話しています。

そしてこの「こだわり」がどこにこだわるかによって、様々な音にかかわる仕事をして行く上で重要であり、またこれが実に面白いということがわかってきました？

なにが解ってきたのか？ 良い音も好い音も誤解を生みそうですがそれほど重要では無いということです。(否定はしていません)

良い音であり好い音であることは基本当たり前なことなのです。この側面で作品を評価していることは作品の本質を理解しているとは言えません。絵画や彫刻を評価するとき絵具の質や素材の質を評価の材料にしているのでしょうか？、音作品も同様です。

確かに雑音のある作品より無い作品の方がより良いに決まっています。良識ある皆様は、まさかこうしたことを論点にしないことは承知しています。その通りです作品はそのフォルムや色彩、音色などの要素と作り手想いの具現化をもってして評価されるのです。

音にこだわりをもって構築された作品は評価されます。その構築＝制作作業が評価の対象なのです。(評価は作り手の想いも含む)

結果その作品が、素晴らしいものであったりするので。ミュージシャンがエンジニアであったり、エンジニアがミュージシャンであったりすることは、昨今よくあります。出来上がる作品は思い入れが十分すぎる作品となるでしょう。

商品としての作品？としては若干客観性に問題があるかもしれませんが。しかし作品の本質、表現しようとしていることに、こだわった音創りになっていることは明らかです。

間違いなく作者にとっては「こだわりの音」の作品となっています。さらに良い音であれば文句ありません。エンジニアの皆様は作曲者や制作とコミュニケーションをとり「作品のこだわり」がどこにあるのか、またその「こだわりの音」とは、そしてそのこだわりの音を理解することによって、良い音の収録などが可能となることを理解してください。

上から目線的にももの申しているようで申し訳ありません。しかし、いつも筆者は自身をこの観点で戒めている？ようにしています

☆次回は

まだまだ続く生活行動の自粛、筆者は娘とネットで飲むようになりました。娘は成長するとともにオヤジとは距離を置くようになり、一緒に飲むことなど非常に稀なこととなっていますが、互いに自粛生活でネットならと、飲む機会も増えたことは嬉しいコロナ影響？です。

そんな自粛生活で面白い商品を見つけました。工作キットです。まだまだ先の読めないコロナ自粛、家の中で楽しめるスタジオ夜話的なものを紹介します。

お楽しみに！！今回もお付き合いいただきありがとうございます。

— 森田 雅行 —